

編集後記

今回の『眼科』の特集は“生物製剤によるぶどう膜炎の治療”である。ぶどう膜炎の治療も、生物製剤の登場によってだいぶ変わってきたと痛感する。竹内先生と水木先生の概論にあるように、もともとはTNFを標的とするインフリキシマブが関節リウマチを対象として開発され、それが眼科領域ではまず2007年にベーチェット病に用いられるようになり、現在では難治性ぶどう膜炎の治療の重要な選択肢のひとつになっている。生物製剤による治療の進歩は非常に喜ばしいことだが、医療経済という立場からみるとまた違った側面が見えてくる。

たとえば、今使われているさまざまな生物製剤はTNFを標的とするものが多く、ほとんど米国で開発されたものだ。IL-6をターゲットとするトシリズマブは本邦の中外製薬が開発したが、スイスのロシュグループの傘下に入った。日本の製薬会社はかつて低分子化合物では強みを発揮していたが、生物製剤の時代に入って優位性を失った。生物製剤の多くを海外から

導入しているため、現在の製薬における国内外収支は、年間3兆円の赤字となっている。医療機器の1兆円の赤字をあわせると年間4兆円の赤字を出しており、この傾向はこれからも拡大していくものと危惧されている。確かに眼科でも、顕微鏡や白内障の手術器具、IOLなどの多くが海外製品であり、良い医療を行うほど外貨が流出し日本が貧乏になるということだ。

政府は平成19年に学校教育法を改正し、大学の責務として「研究、教育」に新たに“イノベーション創出”を加え、アカデミアの力を産業に発揮できるように法整備を行った。次世代の製薬や医療においては、日本発の製品を開発して外貨をしっかりと稼げるようにしたいという方針である。iPS細胞を使った再生医療やiPS創薬、分子量の少し小さなペプチド治療などはまさにこの流れであり、大きな期待が寄せられている。未来の『眼科』の特集では“日本で開発された次世代の生物製剤”などの特集が実現することを祈って編集後記としたい。
(坪田一男・記)

編集：富田剛司・坪田一男・後藤 浩・飯田知弘・雑賀司珠也・門之園一明・石川 均
編集顧問：所 敬・小口芳久・臼井正彦・澤 充・谷原秀信・岸 章治・三村 治・飯島裕幸

「眼科」 第62巻 第6号 6月号

2020年6月5日発行（毎月1回5日発行）

定価（本体2,800円＋税）

年間講読料金 定価（本体42,100円＋税）

〔年間13冊（臨時増刊号を含む）の誌代〕

〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村直樹

〒113-0034 東京都文京区湯島2-31-14

Tel 03 (3811) 7165 [編集室直通]

Tel 03 (3811) 7184 [営業部直通]

FAX 03 (3813) 0288

ホームページ <http://www.kanehara-shuppan.co.jp/>

振替口座 00130-1-191269

印刷所 横山印刷株式会社 Tel 03 (3622) 6161

広告申込先 福田商店 Tel 06 (6941) 5600

・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・JCOPY <出版者著作権管理機構 委託出版物>

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088、FAX：03-5244-5089、e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。